Ⅶ 白山火山の歴史時代の活動

東　野　外志男（石川県白山自然保護センター）

1　はじめに

古文書に記された白山火山の活動記録については，これまで大森(1918)・森田(1929)・玉井(1935, 1957)・武者(1941)・日置(1942, 1956)・石川県・金沢地方気象台(1961)・上杉(1986)などによってまとめられている。しかしながら，それらは用いた史料や，同じ史料に対しても評価が異なることがあり，必ずしも全てが一致しているわけではない。今回，それらの研究をもとに同火山の活動に関連ある記録を収集し，その内容を検討した。

今回収集した記録は，内容の違いから２つに分けられる。１つはその内容が白山火山の活動を直接に示すもので，もう１つは直接に白山火山の活動を示すものではないが，白山火山の活動を示していると解釈可能なものである。ここで直接に白山火山の活動を示していると解釈したのは，描写された内容が現在の知識から火山活動を示していると推定できるもの（例えば，長久三年の『白山之記』の”童子”や天正十年の『混見摘写』の”法師”の出現が噴煙を表わしているがごとく）や，”自焼”や”焼出”，”地獄出現”，”発火”のような語句が白山の山に対して用いられているものである。間接的に白山火山の活動を示す記録とは，直接に白山火山の活動を示していないが，その内容から間接的に白山火山の活動を示すと解釈することが可能な記事である。

収集した古文書の記事は全て原文の形で表としてまとめた（表Ⅶ-１・Ⅶ-２）。表Ⅶ-１はその内容が直接に白山火山の活動を示すもので，一方，表Ⅶ-２は間接的に白山火山の活動を示すと解釈することが可能な記事である。表には出典を明記し，出典が写本や版本の場合にはその所蔵先も示した。

以下では，白山火山の活動に関連する記録をほぼ年代順に追って記す。その際，表Ⅶ-１・Ⅶ-２の古文書の記事は全て現代語訳（ただし，月日は旧暦）で示した。

2　白山火山の歴史時代の活動に関連する記録

慶雲三年（706年）の記事

慶雲三年(706年)の記事は，白山火山の活動に関連すると考えられている記録のなかで最も古いものである。『続日本記』の慶雲三年のできごとを記したところに，”八月三日（旧暦の月日），越前の国から山火事があって止まないという言上があったので，使いを派遣して管内の神に供物を奉納して，これを救済した。”という記事がある。同じ内容の記事が『類聚国史』第百七十三巻や『日本紀略』にも載っているが，『続日本記』の記事をもとにしたものである。ここでいう山火事とは，被害が長く続き朝廷からわざわざ使いを差し向けるくらいのものであるから，白山火山の噴火によるものではないかと推定されている（玉井，1957；上杉，1986）。ちなみに，当時は加賀が越前の国から分国する以前である。ただし，『続日本記』第三巻の同じ慶雲三年のところに，”七月二十四日，丹波と但馬の二国で山火事があったので，使いを派遣して供物を神々に奉納したところ，雷がたちまち鳴り響き，たたいて消火をしないのに，山火事は自然に消えた。”という記事がある。山火事は雷雨によっ

て消えたと考えられる。但馬の国には，第四紀に活動した神鍋火山・宝火山・玄武洞の火山が知られているが，歴史時代に活動したものではない。そのことより，この記事でいう丹波と但馬の国に起きた山火事は単なる山火事と解釈され，上に紹介した越前国の山火事も白山火山の噴火と関係づけるのは誤りではないかという意見もある（日置，1956）。

仁寿三年（853年）・貞観元年（859年）の記事

天皇の権威が高く政治の中心となっていた九世紀中ごろには，火山活動が激しくなった際に山の神に位階を授けるということは普通に行なわれていたようである。白山についていえば，『日本文徳天皇実録』の仁寿三年(853年)十月のところに，”二十二日，加賀国の白山比咩の神を従三位に任じた。”（同じ内容の記事が『類聚国史』第十四巻にもあり）と，『日本三代実録』の貞観元年(859年)一月二十七日の条に，”加賀国の白山比女の神に正三位を授けた。”（『類聚国史』第十五巻に同じ内容の記事があり）という記事があり，これらが白山火山の活動に関係したものであると推定することは可能である。ただし，神に位階を授けるのが必ずしも火山の活動を鎮める時だけに限られていたわけではないので，これらの記録も白山火山の活動に関係していると結論するには，慶雲三年のものと同様に慎重になる必要がある。白山比咩の神の叙位の記録を白山火山の活動に関連ある記録として示した大森(1935)が，「或ハ白山ガ噴火セシヲ示スニ非ザランカ」という注をつけているのもそのためである。ちなみに，白山比咩の神はその後，寛平九年(897年)に従二位，天慶三年(940年)に正二位，永保元年(1081年)に従一位，そして永治元年(1141年)に最高位の正一位に昇進しているが，これらは白山火山の活動とは関係がないものである。

元慶八年（884年）の記事

大森(1918)が仁寿二年・貞観元年の記事のほかに「或ハ白山ガ噴火セシヲ示スニ非ザランカ」という注をつけたものに，元慶(884年)の記事がある。それは『日本三代実録』の元慶八年(884年)三月のところに記されているもので，内容は次のとおりである。”二十六日に霜がおりた。僧正法印大和尚位（僧侶の最高位）の宗叡がお亡くなりになった。（中略）（宗叡が京都の比叡山で修行をしていたとき），比叡山の主神が人の口をかりて告げて言うのには，「あなたの行なう苦行は私がかばいまもりましょう。遠くに出かけたときには，二羽の鳥があなたに従って，暗い夜には行く手を火で照らすでしょう。これをもってよりどころとしなさい。」。その後，宗叡が越前の国の白山に行き着いたとき，二羽の鳥が飛んできて宗叡の前と後に従った。そして，夜中に火があって自然に道を照らし，これを見た人たちは不思議に思った。”。ここで，道を照らした火が白山の噴火によるものであると解釈することは可能である。この火が白山火山の噴火によるものとしても，記事内容からわかるようにその年月日は特定できない。前後の文章内容から，天長八年(831年)から数年経ってから以降ということ以上は明らかでない。

長久三年（1042年）の活動

長久三年(1042年)の活動記録は『白山之記』に記されている。『白山之記』は泰澄大師の伝承や白山宮の由来などを記したもので，12世紀の中頃に成立したといわれている。その頃の白山宮のことを知ることができる唯一のものであり，また，わが国における山岳信仰を知るための基本的な文献の一つである。1950年に国の重要文化財に指定されている。『白山之記』に記されている記事は以下のとおりである。

”長久三年(1042年)のことである。一人の悪僧があらわれ，名を出雲の小院良勢と称した。生まれつき凶悪な性格で，越前室に住んで法にそむく行いをしていた。白山の権現様を坂の下の方へ降ろし，新宮と称した。（加賀・越前・美濃の）三馬場の座主（僧侶の職名）や別当（僧侶の職名）を追放し，参詣人の進物を無理やり奪いとっていた。このような法にそむくことを行なっている頃，加賀馬場の行者ら数十人が越前馬場へ行き，初更の時（午後８時頃）に良勢が住んでいる室の戸を塞いで，焼き殺そうとした。その時，良勢の言うことに，「私の身は既に権現様の罰を受けている。立とうとしても立つことができぬ。ただこの室内に泊まっている数十人の参詣人が焼き殺されることは道にそむいている。この人たちを外に出した後に，火をつけよ。」と云々。良勢の言うように，一人一人順に外へ出し終わった後，良勢を焼き殺した。火をつけた者たちは加賀室に泊まり，次の日に中本宮に下った。その室に一人の僧がとどまって住んでいたところ，夜半に大声があり，「汝，室を出よ」と言って，石を室に投げつけてきた。僧は迷い憂えて室を出ないでいると，再び石を投げつけてきた。何度も石を投げ打ってきたけれども，ますます恐れをなして出ないでいた。幾度も幾度も土石を投げつけてくるのが雨のようであった。僧はこの時迷って室を出たところ，傍らに一丈（丈＝約３メートル）余りの采女という名の石があった。その石の影に隠れてこれを見ていると，山頂の方の後に二人の童子が出てきた。その童子は長さ十丈ほど土石を掻いて室を埋めた。そこに二，三棟，合わせて四，五棟あったかと思われる室を埋めて，一つの山をつくった。その土石を掘った跡が２ケ所あり，１つは水が澄んで現在翠ヶ池と名付けられている。もう一つの場所は深い谷になったが，その土石が道に投げられて，細長い小山をつくった。埋もれたところに室堂の材木の端が少しでていた。不思議なことは，一つ一つ挙げて数えられないくらいであった。その理由を考えるに，放火をして人を殺害した輩が寝泊まりしたため，神聖な山は不浄になり，神が怒ってこれを埋めてしまったのでしょうか。人の目に見えぬ神様が行なったことは，これから先末代まで及び，有難いことです。”

この話は一種の説話であるが，このなかで山頂部に出現した”童子”が噴煙であり，童子が行なった行為（大きな声を出したり，岩を投げつけてきたことなど）が火山活動によることは，文章内容から推測できる。この記録は実地見聞があり，その内容が具体的であることから，いくつかある白山火山の活動を示した記録の中でも信頼性の高いものの１つである。ちなみに，飛騨の国の住人で白山の権現様を家に持ち帰ったものがあるという話が，『白嶽圖解』に記されているということである（森田，1929）。ここでいわれている越前室は現在の室堂がある位置にあったものであるが，当時の加賀室は現在の加賀禅定道の加賀室跡ではなく，大汝峰と千蛇ヶ池の間あたりにあったと考えられている（栂，1986）。Yamasaki et al. (1964)はこの時の活動は水蒸気爆発によるものと推定している。それはこの活動が真夜中に起きたにもかかわらず，火が見えたとか明るくなったとかいうような記述がないこと。また，埋もれた室が木材でできているにもかかわらず，燃えたとか焼け焦げたとかいうような記述がないためである。大きな岩を頂上部から多数吹き飛ばしており，かなり爆発的な活動であったと考えられる。僧が隠れた采女石はどの石をさすのか定かではないが，天文二十三年（1554年）の活動を記した文書にも登場する。

噴火口である翠ヶ池については次のような伝説が残されている。

”昔，越前に，ふこうえん（普光院）という悪僧がいた。この上ない親不孝者で，常に両親を苦しめ泣かすこと甚だしいものがあつた。この悪僧が，何を思つたのか白山へ登り，翠ヶ池のほとりに至つた。水中に手をいれて水をまぜると涼気がしみて気持がよい。手を水からあげると，火傷をしたように熱くてたまらぬ。再び水中に入れると涼しいので，次第に手足からつけはじめた。気がついてみると全身が水中にある。驚いて岸に上がろうともがいたが，身体が重くて動きがとれず，深みへ深

みへとはまり込んで，ついに池中に没して死亡してしまつた。それからこの池を「ふこうえん地獄」とよばれるようになつたのだと伝える。”（白峰村史編集委員会，1959）

同じような内容のことを語った話が，上杉(1986)や石野(1990)にも取り上げられている。それらによると，この話は16世紀後半の天正年間（1573～1592年）の出来事であったといわれている。ここで，僧が手を翠ヶ池から外へだしたときには火傷をしたように傷みだしたということは，当時翠ヶ池に多量の火山ガスの成分がとけ込んでいたためと解釈可能である。

延応元年（1239年）の記事

この年については，『和漢三才図絵』の「白山」の項に”延応元年，自ら焼いた”という記事が，『新編分類本朝年代記』の「白山権現」の項に”山が四条院天皇の延応元年に自ら焼いた”という記事がある。これらの記事はそのままに解釈すれば，延応元年に白山火山が活動した意味になる。しかし，玉井(1935,1957)は『白山宮荘厳講中記録』の記録をもとに考察し，これらの記事は白山本宮の火災を誤って白山の噴火としたものであるとした。『和漢三才図絵』では，単に”白山”が自ら焼くとなっており，玉井はこの場合の”白山”はもともとが白山本宮のことをさしていた可能性もあり，必ずしも『和漢三才図絵』の記事が間違っていたのではないかも知れないと論じている。『新編分類本朝年代記』では，この”白山”を山の白山ととり，山が自ら焼いたという記事になってしまったのではないかと，玉井は推測している。玉井の議論は，現在私たちがもちうる資料では，信頼するにたるものと思われる。

天文十六年（1547年）の活動

長久三年（1042年）以降ほぼ500年の間は，白山火山が活動したことを示す確かな記録はなく，白山火山の静穏期といえる。しかし，その後，16世紀の中ごろから17世紀の中ごろまでのほぼ100年の間で，白山が活動したとされる年は10年を越える。その最初の活動が天文十六年のものである。

『狼丸又ェ門家景由緒書』には，”天文十六年五月の末より，白山は頂上より焼出し，火煙や土砂を吹き出した。ようやく九月になって鎮まった。この年白川郷では米や麦などの穀類が不作だった”という記事がある。狼丸家は現在の美濃白鳥にあった郷士である。白川郷は現在の庄川の上流域にあり，穀物の不作は白山火山から噴出した火山灰の降下によるものと考えられる。白山火山の活動によって麓の人間生活に被害を被ったという記事は，天文十六年の記事の他では，天文二十三年のものだけである。

この年の活動を記したものはほかに，”後奈良院天皇の天文十六年に，白山の麓に地獄が涌きだした。”（『新編分類本朝年代紀』）や，”天文十六年の二月三日に，加賀の白山が焼出した。”（『年代略記』）という簡単な記事がある。

天文二十三年（1554年）の活動

天文二十三年から始まった活動について記した史料の数はほかのものに比べて格段に多く，簡単な記事も含めると確認できたものでも15以上にもなる。その中では，白山比咩神社に残されている『白山宮荘厳講中記録』や，長滝寺に関した記録を収めた『長滝寺荘厳講執事帳』や『長滝寺経聞坊年代記録』・『長瀧寺真鑑正編』に，この異変に対して実地見聞のため人を現地に遣わしたことが書かれており，信頼性の高いものである。

『白山宮荘厳講中記録』は，13世紀の初頭から16世紀中ごろにかけての白山本宮（鶴来）の出来事

を記したもので，当時の白山本宮のみならず，加賀地方全体の動向を知るための貴重な文献である。そこに記されている天文二十三年の白山火山の活動の様子は次のとおりである。

”天文二十三年四月一日，禅頂（山頂）より煙が立ち登った。これを怪しく思い，五月（四月の誤りか）二十八日に山伏の実乗坊永賢（実乗坊と永賢坊という解釈も可能）を遣わしこれを見分させた。そうしたところ，剣山（剣ケ峰）の南方が焼け上がり大きな岩を吹き上げて，（白山奥宮）正殿の大きな床の間の屋根が打ち抜かれていた。その後，五月ごろになって大川（手取川）の水に灰と硫黄が流れて魚が死に，人々は川の水を飲まなかった。六月ごろになると，剣山全体がかごの編み目から煙を噴き出しているような状態であった。十月八日に大震動が起き，国中の人々は非常に驚き，当寺（鶴来の白山本宮＝白山寺）までにも煙が充満した。川水は又以前のように濁り，その後，湯が煮えるのが立山の地獄のようであった。活動は弘治三年(1557年)に止んだ。総じて，采女（石）の辺が伝え聞くところによると，様相が一変したということである。”

この記事によると，この時の活動は，”丙辰の年”（弘治二年；1556年）に止んだとなっているが，『白山宮荘厳講中記録』よりは成立が１世紀ほど後になる『白山諸雑事記』によると，弘治三年(1557年)を活動の終息した年としている。『白山諸雑事記』の記事は古記録をもとにしたものであり，記事内容からその古記録は『白山宮荘厳講中記録』である可能性が強く，弘治三年は弘治二年の誤記であろう。

岐阜県美濃白鳥町の長滝寺に所蔵されている『長滝寺荘厳講執事帳』には，”天文二十三年四月二日より白山の御前・剣山が焼出した。地獄五色に涌き上がること一丈（約３メートル）余りであった。院主（住職）の道雅や宝光坊の良松，西泉坊の者たちその他が五月十五日に参詣した。前代未聞の様子であった。”という記事がある。他の長滝寺関連の古文書（『長滝寺経聞坊年代記録』，『長瀧寺真鑑正編』）に記されている内容も，これとほぼ同じである。長滝寺は当時美濃馬場禅定道の拠点となっていた。

『猿丸又ェ門家景由緒書』には，”天文二十三年三月より再び白山の雪頂より焼出・炎え上がり，土砂を吹き飛ばししかも雪の飛ぶが如し，この年村里では五穀の一切に実がならなかった。”と記されており，このときにも天文16年と同様に，美濃白鳥で作物に被害が出たようである。ほかにも，天文二十三年の活動を記した記録が多くあるが，”白山が焼出した。”や”白山が火を発する”などというような簡単なものが多く，ここではこれ以上取り上げない。

天文二十三年の活動は，上述の記事から長久三年（1042年）の時の活動とは異なり，”剣山の南方が焼け上がった”や”川に硫黄が流れた”，”地獄五色に涌き上がる”などの表現からもわかるように，明らかに高温のマグマを噴出している。噴火場所としては，『白山宮荘厳講中記録』では剣ケ峰（剣山）とその南方を，『長滝寺荘厳講執事帳』では剣ケ峰と御前峰をあげている。剣ケ峰の南方は凹地になっており，現在の地形からもそのあたりがかつての火口であったことが推定できる。『白山諸雑事記』には，”剣山の山の状態は，天文二十三年の噴火の時，ことごとく破損してその姿はなくなった。剣山のみならずその他の山の様子も変わった。”と記されている。これらのことからわかるように，このときの活動は特に剣ケ峰及びその周辺で激しかったようである。天文二十三年(1554年)の活動の開始した月については，３月と４月，５月があり，必ずしも一致していない。

このときの活動で噴煙は鶴来の白山本宮まで届き，活動は断続的に２年間続いており，かなり活発な活動であったことが想像される。その際の活動の痕跡も山頂部のどこかに残されていることが期待される。現在のところ，最も有力視されてるのが血の池付近から西の方に延びている緩斜面に見られる熱雲堆積物である（Yamasaki, et al., 1964）。歴史時代には天文二十三年の他にも何度か白山は

活動しているので，この堆積物が天文二十三年の活動の際に噴出してものであると断定は必ずしもできないが，最も有力なものである。

白山の活動を直接記したものではないが，興味ある記事が肥後国（熊本県）人吉市の相良家の古文書に記されている。それには，”一向宗は厳禁する。現に加賀の白山が噴火したのは，一向宗が原因であることはいうまでもなくはっきりしている。”と記されている。この文書は日付が天文二十四年二月七日になっており，ここに記されている白山火山の噴火とは，天文二十三年から始まった活動のことをさしている。加賀の一向一揆で知られるように，一向宗は当時の支配者からは危険視されていた宗教である。相良家の古文書は当時の支配者の生の声を記したもので，どの国でも加賀の国のように一向宗が広まるのを恐れていたのでしょう。通信手段がそれほど発達していない当時，遠く離れた熊本でも支配者層がそのことに不安を覚えていたということは，一向一揆のことの大きさを示すものであるが，同時に，天文二十三年の白山火山の活動も全国各地に知られていたということを，この文書は示しているといってよい。天文二十三年の活動は，それだけ活動が激しかったと考えられる。

天正七年（1579年）の活動

この年の活動は17世紀末に成立したといわれる『白山年代記并由緒』や『白山縁起』に記されている。その内容は，”天正七年八月二十八日，白山地獄谷の大穴から吹き上がって，白山大御前の仏像や社堂を共に破損した。”というものである。天正七年という年は，織田信長が天下をとってまだ間もない頃で，『古今類従越前国誌』には，”天正七年八月二十六日地獄谷より火石がふり，社壇やご神体を壊した。翌年六月，織田信長が三つの社を再建した。”という記事がある。この地獄谷とは中ノ川の支流をさす。地獄谷の上流部には噴出口を思わせる地形は現在残されておらず，地獄谷の”大穴”とはどこをさすのか明らかではないが，山頂部からそれほど遠くないところと考えられる。この年の活動を記した他の記録もこれとほとんどかわらない内容である。活動を開始した日については八月の二十六日と二十八日がある。

『混見摘写』にみられる白山火山の活動記録

『混見摘写』に記されている白山火山の活動記録のほとんどが，これまでの研究では見落とされていたようである。石川県・金沢気象台(1961)には，『混見摘写』に記されているものとして正保二年（1645年）の活動記録が載せられているが，この書物には他にも十ばかりの活動記録が記されている。白山火山の歴史時代の活動を検討する際，決して見落とすことのできない重要な文献である。『混見摘写』は加賀藩の与力であった吉田守尚が寛保元年（1741年）から安永四年（1775年）までの約35年間の間に，織田・豊臣・徳川・前田・その他諸藩の武事や奇談，古人の評論などさまざまなでき事を集録したもので，そこには白山火山の活動について，以下の記述がある。

”この度の白山の大きく鳴ったことについてお尋ねがあり，それに対して申し上げたことである。

一，（織田）信長様の時代に白山が鳴った。大雲を吹き破り，その時に（白山比咩神社の）奥宮も壊れてしまい，後に建立した。

一，信長様がお亡くなりになった（天正十年（1582年）六月二日）頃に黒雲が出現し，そのなかから法師の形をした者が三人見えた。

一，加賀大納言（前田利家）様がお亡くなりになったおり（慶長四年（1599年）三月三日），初七日の間に白山が鳴った。

一，慶長五年（1600年）に白山が鳴った。これは関ヶ原の合戦のためである。

一，但馬（松平直良）様が勝山の藩主でおられた時（寛永十二年（1635年）～正保元年（1644年）），白山が大きく鳴った。これは島原の乱（寛永十四（1637年）～十五年（1638年））のためである。
一，正保二年（1645年）の四月五日と四月二十六日に鳴った。これは筑前（前田光高）様がお亡くなりになった（正保二年四月五日）ためである。
一，大和守（松平直基）様がお亡くなりになった時（慶安元年（1648年）八月十五日）にも鳴った。
一，去年（万治元年（1658年））の九月四日に鳴った。北南のあたりに光るものが一つ山のなかに入った。十月十二日に小松中納言（前田利常）様がお亡くなりになった。
一，当該（万治二年（1659年））の二月晦日に大きくなった。白山に灰が降った。
一，同じ年（万治二年）の六月五日の朝晩夜と一日中鳴った。別山の南北のあたりに黒い雲が出てきた。そのなかから長さ１丈（約３ｍ）くらいの法師が三人見えた。

右（上）の事，牛首村と風嵐村にいた者達が命を慎んで受けて申すには，地獄が大空に響きわたる様子を思い起こすようであったということである。以上。

万治二年六月九日

右の諸々の事，寄合所へ書き上げて申したことである。”

ここでいう牛首村と風嵐村とは白山の麓の集落のことで，現在の白峰村の字白峰と字風嵐にあたる。この記事はお上からの問い合わせに対して寄合所に報告したもので，ここで”鳴る”とはもちろん”音が鳴る”ことをいっているのであるが，その音が火山活動の際に発せられるものであることはこの記事の内容から理解できる。また，黒い雲や法師は噴煙を示している。万治二年六月五日に出現した”法師”は，身長が１丈（約３ｍ）で，噴煙にしては小さすぎる気もするが，普通の人間よりはずっと大きいという気持ちを表現したかったのであろう。万治元年九月四日の記事のところにみられる”光るもの”とは，一般に流星や彗星，稲妻など空中を光りながら移動するものをさすが，この場合にその”光るもの”が火山の活動に直接関係したものかどうかははっきりしない。

『混見摘写』に記されて十ほどの記事のうち，記事内容からは活動年代がはっきりしないものが二つある。一つは一番最初に記してある”信長様の時代に白山が鳴った。云々”である。これはその内容から，さきに紹介した天正七年の活動の事をさしていると考えられる。もう一つは”但馬様（松平直良）が勝山に藩主としておられたとき，云々”の記事である。松平直良が藩主として勝山にいたのが寛永十四年（1637年）から正保元年（1644年）の間で，後述するように寛永十七年（1640年）に大汝峰から長滝寺にかけて火山灰が三寸ほど降るという記事があることから，この記事は寛永十七年の活動を表わしている可能性が高い。『混見摘写』の記事のうち天正十年（1582年）や慶長四・五年（1599・1600年）・正保二年（1645年）・慶安元年（1648年）・万治元年（1658年）の年のものはこの書物だけに載っているもので，貴重な記録である。

寛永十七年（1640年）の活動

この年の活動は『長滝寺荘厳講執事帳』に記されている。記されている内容は具体的で，しかもこの古文書が美濃馬場禅定道の拠点であった長滝寺（長瀧寺）に残されているもので，信頼できるものである。内容は次のとおりである。

”寛永十七年（1640年）六月十五日の午後７時頃から夜明けにかけて赤く光った。多くの人々がこれを不思議に思っていると，白山の大汝（峰）より長瀧寺まで，灰が二晩三日のうちに三寸（寸＝約３cm）ほど降り積もった。そのうちに，空じゅうが赤く光った。不思議なことが多いことであった。経聞坊の慶祐が書きとめたことである。”

空が赤く光るのは頂上部で火山活動を開始したためである。白山山頂の南南東約30kmに位置する長滝寺で三日のうちに火山灰が10cm近く堆積したのであるから，このときの噴火が大きなものであったことが想像できる。

万治二年（1659年）の活動

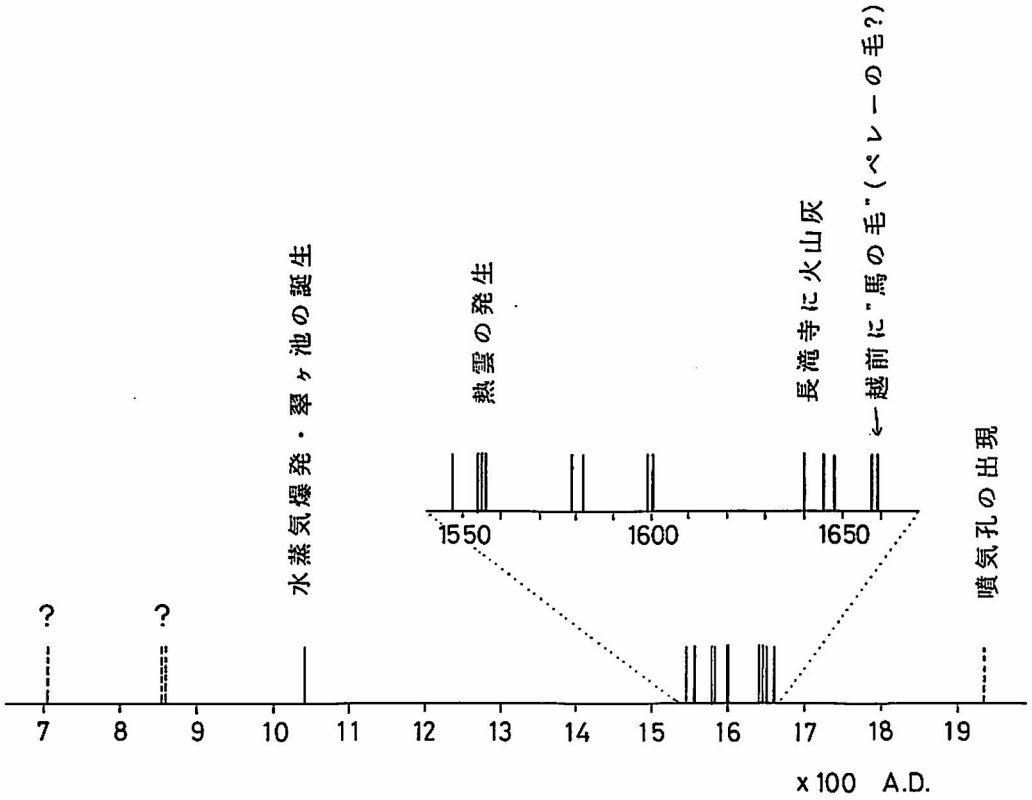
万治二年の活動は，古文書に記されているものでは最も最近のものである。この年の活動を記したものに先に紹介した『混見摘写』がある。そこには，二月三十日に火山灰が降ったことや，そしてその後六月五日に黒雲が出現したことが記されている。他にこの年の活動を記したものに『長滝寺荘厳講執事帳』があり，そこには『混見摘写』より詳しい内容の記事が載せられている。ただし，六月の活動についてのみ記されており，日は『混見摘写』とは異なり六月八日に黒雲が出現したとなっている。記事の内容は以下の通りである。

”（万治二年）六月八日の巳の刻（御前９時頃から11時頃まで）の頃に，御山（白山）の御廚之池（翠ヶ池）の上に黒雲が少しばかり出た。しばらくすると幾度も幾度も音が鳴り響き，その後，その雲のなかより坊主の身なりで三人が頭をならべてわきより上を現わした。室々の別当（僧侶の職名）はいずれもこれを拝んで，不思議に思っていたところ，三州（三河）はず村の道者六人が仲間に加わり，これを拝んだ。すなわち，御来迎と思って拝んで，元結をとって下山した。しかし，これは御来迎ではない。その後日ごと日ごとに御山が音をだすことがおびただしくなり，しまいに数えられないくらいになり近国まで鳴り響いた。同（六月八日）夜は月が澄みわたり晴れ渡っていたが，月より三筋の光が三方へ流れ，そのうちの一筋の光は甚だしく光り，しばらくして消えた。
一．同（万治二年）六月十八日から二十日まで，越州（越前）の国中に葦毛の馬の毛が降った。慶祐が書きとめたことである。”

六月八日に山頂でみられた現象は，この筆者もいっているように御来迎でないことは明らかである。黒雲や大きな音など，火山活動が起きたことを示している。六月十八日から二十日にかけて降った葦毛の”馬の毛”とは，その内容から火口から空中に放出されたマグマが細長く引き延ばされ，細かく繊維状になったものをさしていると想像される。白山火山の噴出するマグマは一般に安山岩質で，細かく繊維状になることは通常ないと考えられる。しかし，白山火山のマグマのなかにも多少玄武岩に近い組成のものもあり，このときに噴出したマグマもそのような粘性の低いものであったのかもしれない。

3　ま　と　め

以上述べた白山火山の歴史時代の活動をまとめると図Ⅶ-1のようになる。図には昭和十年（1935年）の”噴気孔”の出現（東野・山崎，1988）も記してある。白山火山が活動を行ったことが明らかなものは，長久十年（1042年）のものを除けば，天文十六年（1547年）から万治二年（1659年）までのほぼ100年間のものである。天文二十三年（1554年）に始まった活動は弘治二年（1556年）まで続いており，その間も活動した年に含まれるので，この16世紀中頃から17世紀中頃までの113年のうち活動した年数は13年である。ある活動が起きたから次の活動が起きるまでの年数は最も長いのが40年で，平均すると約８年である。長久十年（1042年）の活動から天文十六年（1547年）の活動までほぼ500年の間隔があり，また，万治二年（1659年）から後，現在まで昭和十年（1935年）に千仞滝付近に小規模な噴気孔が出現した以外は，白山は活動らしい活動を行っていない。このことから，天文十六年（1547



図Ⅶ-1　白山火山の歴史時代の活動記録

年）から万治二年（1659年）までのほぼ100年間は，白山火山が最も頻繁に活動していた時期といえる。

4 文　献

東野外志男・山崎正男（1988）1935年に白山千仞滝に出現した”噴気孔”について．石川県白山自然保護センター研究報告，no.15，p.1-7.

日置　謙（1942）加能郷土辞彙．982pp．北国新聞社．

日置　謙（1956）改訂増補加能郷土辞彙．1042pp．北国新聞社．

石川県・金沢地方気象台（1961）石川県災異誌．178pp．石川県．

石野春夫（1990）白山　峰と谷の昔話．280p．若草書房．

森田平次（1929）白山神社考（白山比咩神社叢書第五輯）．107pp.，國幣中社白山比咩神社．［「白山比咩神社叢書」合本復刻版，1975，名著出版］．

武者金吉（1941）増訂大日本地震史料．945pp．　文部省震災豫防評議會．

大森房吉（1918）日本噴火誌上編．236pp．　震災豫亡調査會．［復刻版，1973，稔書房］．

白峰村史編集委員会（1959）白峰村史　下巻．924p．白峰村役場．

玉井敬泉（1935）加賀國手取川出水考　付流言蜚語．44pp．

玉井敬泉（1957）白山の歴史．70pp．石川県．

栂　典雅（1986）加賀禅定道の道．はくさん，vol.14，p.5-7.

上杉喜寿（1986）白山．411pp．ビジョン北陸．

Yamasaki,M., Nakanishi,N. and Kaseno,Y. (1964) Nuee ardente deposit of Hakusan Volcano. Sci.Rep.Kanazawa Univ., vol.7, p.189-201.

表Ⅶ-1　直接に白山火山の活動を示す記録

和暦	西暦	記事
長久三年	一〇四二	○然間長久年中壬午一悪比丘出来、号出雲小院良勢、其性凶悪其行非法、住越前室、権現奉下其方坂本、号新宮、追去三方座主別当、押領参人所進物、致如是等非法之間、加賀馬場行人等数十人、望越前馬場、以初更時打塞彼良勢住所室戸、擬焼殺之時、良勢云、此身既蒙権現罰旱、欲立不能立、但此室内寄宿参人数十人、被焼死無道也、出於此後、可被付火云々、如云良勢一人〻〻次第出旱、其後良勢焼殺、放火輩寄宿加賀室、次日下中本宮旱、其室一人僧止住矣、夜半計有大声、告云、汝出室云而、以石打室、僧迷悶不出、又重打之、雖打、弥為恐不出、屢又投繫(繋)土石、如(雨)両、斯時迷出室、傍有一丈余石、名采女、其石影隠見之、自御在所後有二人童子、長十丈計掻土石埋室、其両三堂宇、惣四五宇埋之、成一岳、其所穿土石跡二所、一所澄水名今翠池、一所雖成深谷、其土石投道、作細長小山、所埋室堂財(材)木端少〻出之、寄(奇)異寄(奇)特不可勝計、案其故、放火殺害蜚寄宿故、極不浄也、仍被埋之歟、冥衆所為及末代、是難有事也、［『白山之記』］
延応元年	一二三九	○山自焼四条院延應元年、［『新編分類本朝年代記』巻一、波之部神社之類白山権現項］
天文十六年	一五四七	○四条院延應元年白山自焼、［『倭漢三才図会』巻五十五、白山項］ ○天文十六年丁未年五月ノ末ヨリ白山嶽頂上ヨリ焼出ル、火煙土砂ヲ吹ル、漸々九月ニ至リテ鎮ル、此年白山郷内五穀不熟、［『猿丸又右ェ門家景由緒書』：『白川日記』所収］ ○後奈良院天文十六年白山麓地獄涌出、［『新編分類本朝年代記』巻一、波之部乾坤并天家之類白山麓項］ ○三日乙酉、加賀白山焼出云、［『年代略記』：『続史愚抄』四十八所収、天文十六年大歳丁未二月大条］
天文二十三年	一五五四	○天文廿三年甲寅四月朔日、当禅頂煙立登、恠之、五月廿八日山伏之実乗〻永賢遣見之、剣(硫黄)山南焼上、大盤石吹上、正殿大床ヤネ打抜、其後五月比大川水灰・ユ横流テ魚死ヌ、人民川水ヲ不含、六月比剣山悉籠目如煙出成、十月八日大震動シテ、国中諸人以外驚ク、当寺煙充満、川水又如前濁ル、其後湯煮事立山ノ地獄同之、又於処〻地獄火薪行ト男女間沙汰、一天下共同之、丙辰ノ年焼留、惣采女辺依報ノ為躰相替也、［『白山宮荘厳講中記録』］ ○一、天文廿三年五月白山焼出、大山焼出ル事往古ヨリ度々也ト云々、古記考ヒ知ルヘシ、天文ノ山焼ノ比ハ尤白山惣長吏ノ支配也、故ニ見分ニ衆徒ヲ遣シタル由旧記ニモ載タリ、 一、右天文廿三年ノ山焼ハ、三月ヨリ焼出、或ハ三月三日ヨリ焼出ルトモ云、又四月朔日ヨリ煙立トモアリ、彼恠異ニ付、当社ヨリ山伏ノ

表Ⅶ-1　（続　き）

和暦	西暦	記事
		大乗坊ヲ遣シ見セシムル由、則登山シケルニ、剣ノ山ノ南焼上リ、大盤石ヲ吹上ケ、正殿ノ大床屋根ヲ打抜タルト云々、其後五月ノ比ハ、大川ノ水灰土横流シ、魚死シ人民川水ヲ不含、六月ノ比ハ、剣山悉ク籠(カ)目ヨリ煙ノ出ルカ如シ、十月ニ至リ当社マテ煙充満、川水又如前濁ル、十月八日ニ大震動セシ故ナリ、其後湯煮ユル事立山ノ地獄ト同シ、又処々ニ於テ地獄火ヲ薪ニ行ト、男女間ニ沙汰ス、天下共ニ同シト其時ノ日記ニ載タリ、 一、弘治三丙辰(丁巳)ノ年白山漸ク焼留ル、天文廿三年ヨリ四年目ナリ、山中(カ)栄女ノ辺報ヒノ躰タラクニテ相替ル由、是モ日記ニアリ、 一、或記ニ天文廿三年甲寅五月六日ニ加賀国白山ノ麓ニ地獄出来スト載タリ、是則彼山焼ノ時ナリ、 （中略） 一、剣山ノ山状、右天文廿三年ノ山焼ノ時、悉ク破損シテ其姿ヲ失ヘリ、剣山ノミナラス自余ノ山状モ変シタルナルヘシ、［『白山諸雑事記』］ ○于時天文廿三年甲寅卯月二日(×八)ヨリ白山御前劔山焼出、地獄五色ニ涌上ルコト一丈余ナリ、院主道雅并宝光坊良松・西泉坊其外五月十五日ニ参詣仕候、前代未聞躰ナリ、［『長滝寺荘厳講執事帳』］ ○同(天文)廿三年卯月二日自白山劔山焼出地獄五色涌上ル事十丈余リ、院主道雅法印・宝光坊良松・西泉坊五月十五日参詣ス、［『長滝寺経閣坊年代記録』］ ○于時天文二十三年甲寅卯月二日ヨリ白山御前劔山焼出、地獄五色ニ涌上ルコト一丈余リ、院主道雅并宝光坊良松・西泉坊其外五月十五日ニ参詣仕候、前代未聞ノ事ナリ、［『長瀧寺真鑑正編』］ ○天文二十三年甲寅ノ年三月ヨリ再ビ白山ノ雪頂ヨリ焼出、炎火土砂ヲ吹飛シ、恰モ雪ノ飛ガ如、此年此郷村五穀一切不實入、［『猿丸又右ェ門家景由緒書』：『白川日記』所収］ ○五月六日に加賀國白山ふもとに地獄出來由申候なり、［『細川両家記』天文廿三年甲寅条］ ○自五月白山焼出、［『和漢合運図』後奈良院天文廿三年項］ ○又後奈良天文二十三年五月、自焼麓地獄出、［『新編分類本朝年代記』巻一、波之部神社之類白山権現項、〃山自焼四条院延應元年〃の記事に続いて］ ○後奈良院乃御宇天文二十三年五月、此山岳ミづから焼て、麓に地獄來現すと云々、［『国花万葉記』巻十二、加賀國神社之部白山権現条］ ○後奈良院天文二十三年五月亦自焼出而麓地獄出云云、［『倭漢三才図会』巻五十五、白山項］ ○五月、白山發火、［『野史』巻六、天文二十三年甲寅条］

表Ⅶ-1　（続　き）

和暦	西暦	記事
		○同(天文)廿三年五白山焼出、［『皇年代略記』後奈良院条］
		○廿三年五月白山焼失、［『皇年代私記』後奈良院天文廿三年条］
		○一向宗之事、いよ〳〵法度たるへく候、すでに加賀の白山もえ候事、説々顕然候事、［『相良氏三代(爲續長毎晴廣)法度寫』天文廿四年乙卯貳月七日付］
天正七年	一五七九	○天正七年己卯八月又白山焼出ル、此時ハ八月廿六日地獄谷ヨリ焼出、火石ヲフラシ、正殿ヲ破壊シ、神躰ヲモ破損スト云、［『白山諸雑事記』］
		○天正七卯歳八月廿八日ニ、白山地獄谷之大穴吹破、白山大御前之仏躰并社堂共破損、［『白山年代記并由緒』］
		○天正七卯年八月二十八日、白山地獄谷ノ大穴吹破、白山大御前ノ御尊躰并ニ社堂共破損、［『白山縁起』］
		○正親町天皇天正七年八月廿八日字地獄谷噴火、社殿并仏像ヲ毀損ス、［『白山比咩神社并摂末社明細図書』］
		○天正七年八月廿六日地獄谷ヨリ火石ヲ雨ラシ社壇及神體ヲ破ル、明年六月織田信長三社ヲ再建ス、［『古今類聚越前国誌』巻四、神社白山明神条］
		○信長様御代白山なり申候、是ハ大雲吹やふり、則御宮もそこね申候を、(マヽ)かんまく一(マヽ)わり建立仕候、［『混見摘写』十八］
天正十年	一五八二	○信長様御逝之砌、黒雲出、其内より法師のかたちなるもの三人見へ申候、［『混見摘写』十八］
慶長四年	一五九九	○加賀大納言(前田利家)様御逝去(慶長四年三月三日)之砌、七日之内白山なり申候、［『混見摘写』十八］
慶長五年	一六〇〇	○慶長(五カ)三年に白山なり申す候、是ハ関ケ原御陣、［『混見摘写』十八］
寛永十七年	一六四〇	○辰ノ六月十五日酉ノ下剋ゟ月有明ニ赤光ス、諸人不思義スル処ニ、白山大汝ゟ長瀧寺迄、ハイ二夜三日ノ内ニ三寸ホトフリタマル也、其内惣天赤光スル也、不思儀(議)多事也、経聞坊慶祐書留也、［『長滝寺荘厳講執事帳』］寛永十七年辰(庚)条］
		○但馬様(松平直良)勝山に御座候砌(寛永十二年～正保元年)、白山大なり申候、是ハ鳴原一乱、［『混見摘写』十八］
正保二年	一六四五	○正保二年酉ノ四月五日・同廿六日なり申候、これハ筑前様(前田光高)御逝去、［『混見摘写』十八］
慶安元年	一六四八	○大和守様(松平直基)御逝去(慶安元年八月十五日)之時もなり申す候、［『混見摘写』十八］
万治元年	一六五八	○去年(万治元年)戊九月四日なり申す候、北南の間ひかり物一ツ山に入申候、十月十二日(万治二年)小松中納言(前田利常)様御逝去、［『混見摘写』十八］
万治二年	一六五九	○當(万治二年)亥ノ二月晦日大なり仕候、白山に灰ふり事、(福井大火事カ)［『混見摘写』十八］
		○同(万治二年)六月五日朝晩(夜ニイ)入、なり申候時分、別山にて南北にあたり黒雲出

表Ⅶ-1　（続　き）

和暦	西暦	記事
		る、其内より長き壱丈計法師三人見へ申候、［『混見摘写』］十八］ ○六月八日己ノ刻計ニ、御山御厨之池ニ上ニ黒雲少計出、暫有而ヲヒタゝ敷鳴テ後、彼雲ノ内ゟ坊主之行躰ニて三人頭ヲ双テ脇ゟ上ヲ顕ス、室々ノ別当何茂是ヲ拝、不思儀(疑)ニ思処ニ、其時節三州ハズ村之道者六人参会、是ヲ奉拝、則御来向ト思奉拝、モトユイヲ払ヒ下山スル也、是ハ御来向ニてハアラサル也、其後日々夜々御山之ヲヒタゝ布ナル事不知度、近国ニ響也、同其夜月サヘテ青天成ニ、月躰ゟ三筋三方へ御光立テ、其内一筋ノ御光甚光、暫有テ消失ス、 一、同六月十八日ゟ廿日迄、越州一国中アシ毛馬ノ毛降也、慶祐書留也、［『長滝寺荘厳講執事帳』万治弐年己亥条］

［凡例］一、字体や誤字・宛字の訂正は原則として出典に従い、返り点・送り仮名・振り仮名は省いた。なお、句読点はすべて「、」に統一し、句読点のないものについては、適宜施した。

右傍の［　］は誤字・宛字を訂正、（カ）は不明の文字を推定して判読したものである。

二は八の上に二が重ねられて書かれていることを示す。

一、著書（東野）による人名・年代の説明注は右傍に（　）で、誤字の訂正は［　カ］で示した。また、［　イ］は異本を、（ママ）は文意が通じないことを意味する。

［出典］『白山之記』・『白山宮荘厳講中記録』・『白山諸雑事記』・『白山年代記并由緒』・『白山比咩神社并摂末社明細図書』（「白山史料集上」、穴田三次郎・能島紘一・木越隆三編、石川県図書館協会発行、1979）、「新編分類本朝年代記」（版本、田　登仙著、大森太右衛門発行、1684、金沢市立図書館「稼堂文庫」蔵）、『和漢三才図会』（復刻版、和漢三才圖會刊行委員会編、東京美術発行、1970）、『白川日記』（写本、結城朝充著、1935、岐阜県立図書館蔵）、『続史愚抄』（新訂増補『國史大系』第十四巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966）、『長滝寺荘厳講執事帳』・『長瀧寺真鑑正編』（「白山史料集下」、能島紘一・伊林永幸編、石川県図書館協会発行、1987）、『長滝寺経閣坊年代記録』（「白鳥町史史料編」、白鳥町教育委員会編、白鳥町発行、1973）、『細川両家記』（「群書類従」第十三輯「合戦部」、塙　保己一編、経済雑誌社発行、1894）、『和漢合連図』（版本（訂補版）、四　智著、丁子屋長浜衛発行、1658、金沢市立図書館「藤本文庫」蔵）、『国花万葉記』（版本（訂正版）、菊本賀保著、河内屋太助発行、1835、石川県立図書館蔵）、『野史』（飯田忠彦・竹中邦香編、国文社発行、1882）、『皇年代略記』（「群書類従」第二輯「帝王部」、塙　保己一編、経済雑誌社発行、1893）、『皇年代私記』（「改定史籍集覧」第十九冊「新加書通記類」、近藤瓶城編、近藤出版部発行、1902）、『相良氏三代爲頼長毎晴廣法度寫』（「相良家文書」（大日本古文書）四七〇号、東京大学史料編纂所編、1912）、『白山縁起』（「白峰村史下巻」、白峰村史編集委員会編、白峰村役場発行、1959）、『古今類聚越前国誌』（写本、有馬純芳著、松任市立図書館「白華文庫」蔵）、『混見摘写』（写本、吉田守尚著、金沢市立図書館「加越能文庫」蔵）

表Ⅶ-2　間接的に白山火山の活動を示すと解釈可能な記録

和暦	西暦	記事
慶雲三年	七〇六	○八月甲戌、越前國言、山灾不止、遣使奉幣部内神救之、[『続日本紀』巻三慶雲三年条・『類聚国史』巻第百七十三灾異部七火慶雲三年条・『日本紀略』慶雲三年条]
仁寿三年	八五三	○己卯、加加賀國白山比咩神従三位、[『日本文徳天皇実録』巻五、仁壽三年冬十月己未条]
		○十月己卯、加加賀國白山比咩神従三位、[『類聚国史』巻十四、神祇部十四神位二仁壽三年条]
貞観元年	八五九	○加賀國白山比女神正三位、[『日本三代実録』巻二、貞観元年己卯春正月戊午朔廿七日甲申条]
		○加賀國、授白山比女神正三位、[『類聚国史』巻十五、神祇部十五神位三貞観元年春正月廿七日甲申条]
元慶八年	八八四	○廿六日丁亥、殞霜、僧正法印大和尚位宗叡卒、 （中略） 宗叡到越前國白山、雙鳥飛隨、在於先後、夜中有火、自然照路、見臭奇之、[『日本三代実録』巻四十五、元慶八年三月壬戌朔条]

[凡例] 一、字体は原則として出典に従い、句続点はすべて「、」に統一した。なお、返り点・送り仮名・振り仮名は省いた。

[出典]『続日本記』(新訂増補「國史大系」第二巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966)、『類聚国史』(新訂増補『國史大系』第五・六巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1965)、『日本紀略』(新訂増補「国史大系」第十巻、黒板勝美・国史大系編集會編、吉川弘文館発行、1965)、『日本文徳天皇実録』(新訂増補「國史大系」第三巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966)、『日本三代実録』(新訂増補「國史大系」第四巻、黒板勝美・國史大系編集會編、吉川弘文館発行、1966)